

開講期間	配当年	単位数	科目必選区分
前期	1	2	選択
担当教員			
高岡 昌子			
火6			
添付ファイル			

授業の目標・概要	教育心理学は、心理学の手法を用いて教育の科学的基礎を実証的に探究し、その知見を応用して、教育の実践に資することを目指す学問である。教育心理学には、リハビリテーション分野と関わりの深い、成長・発達（生涯発達）、学習、認知、人格・適応、臨床・健康、特別支援・障害、学校・保育心理、測定・評価・研究方法・社会などの領域がある。本講義では、教育心理学の主要な理論と、発達・学習・認知などの教育心理学的研究の方法論、ならびに、近年の研究動向と課題を学び、これらの教育心理学分野の学びを生かして人間の健康的な生活を支えるための方法について考え、リハビリテーション分野における研究や実践活動への応用を検討する。
学習の到達目標	1. 教育心理学の歴史的背景・主要な概念・各分野について理解し、説明することができる。 2. 人間における生涯発達と学習に関する主要な理論を理解し、説明することができる。 3. リハビリテーション関連領域における学習者・臨床指導者・教育者の役割と行動に関する心理学的分析と考察を行うことができる。 4. 教育心理学的研究の動向を踏まえ、リハビリテーション領域における問題点とこれに対する解決法を考察することができる。
授業方法・形式	講義
授業計画	<p>第1回 教育心理学の基礎：歴史的背景・概念・各分野</p> <p>第2回 教育心理学の基礎：人間発達に関する主要な理論</p> <p>第3回 教育心理学の基礎：学習に関する主要な理論（行動理論的アプローチ）</p> <p>第4回 教育心理学の基礎：学習に関する主要な理論（認知理論的アプローチ）</p> <p>第5回 教育心理学の基礎：学習に関する主要な理論（動機づけ）</p> <p>第6回 教育現場における心理学の応用（定型発達教育）</p> <p>第7回 教育現場における心理学の応用（特別支援教育）</p> <p>第8回 教育心理学に関する近年の研究動向と課題（概観）</p> <p>第9回 リハビリテーション領域における心理学の応用：高等教育における医療専門職従事者の養成</p> <p>第10回 リハビリテーション領域における心理学の応用：臨床現場における人材育成（後輩育成）</p> <p>第11回 リハビリテーション領域における心理学の応用：臨床現場における対象者への疾病教育</p> <p>第12回 リハビリテーション領域における心理学の応用：医療分野の教育者養成</p> <p>第13回 リハビリテーション領域における心理学の応用：医療分野の研究者養成</p> <p>第14回 リハビリテーション領域の現状における学習と教育に関する課題と研究計画の作成</p> <p>第15回 全体のまとめ</p>
成績評価の基準	各回の授業の理解度を確認する筆記課題（50%） 授業全体の到達度を確認する最終レポート（50%）
課題（試験やレポート等）に対するフィードバックの方法	
準備学習・復習及び授業時間外の課題	（事前学習）事前に配布された資料や指示された参考図書等に目を通しておく。 （事後学習）毎回の授業内容に関する課題を提出する。

履修上のアドバイス及び留意点	
教材・教科書	毎回の授業の前週までに授業で用いる資料を配布する。
参考書	<ul style="list-style-type: none"> <li>・「精選 コンパクト教育心理学―教師になる人のために」北尾倫彦、中島実、林龍平、広瀬雄彦、高岡昌子、伊藤美加 著、北大路書房 (2006)</li> <li>・「絶対役立つ教育心理学 [第2版] : 実践の理論、理論を実践」藤田哲也 編著、ミネルヴァ書房 (2021)</li> <li>・「エビデンスベースの教育心理学―心身の発達と学習の過程」榎本淳子、藤澤文 編、ナカニシヤ出版 (2020)</li> </ul> その他適宜授業で紹介する。
授業の特徴	<p>授業で実践するアクティブ・ラーニング</p> <ul style="list-style-type: none"> <li><input type="checkbox"/> PBL (課題解決型学習)</li> <li><input type="checkbox"/> 反転授業 (知識習得を教室外、知識確認等を教室で行う授業)</li> <li><input type="checkbox"/> ディスカッション、ディベート</li> <li><input type="checkbox"/> グループワーク</li> <li><input type="checkbox"/> プレゼンテーション</li> <li><input type="checkbox"/> 実習、フィールドワーク</li> <li><input type="checkbox"/> その他</li> </ul> <p>その他アクティブ・ラーニング内容</p> <p>授業でのICT活用</p> <ul style="list-style-type: none"> <li><input type="checkbox"/> 双方向型授業に活用する</li> <li><input type="checkbox"/> 自主学習支援に活用する</li> </ul> <p>オープンな教材</p> <ul style="list-style-type: none"> <li><input type="checkbox"/> 担当教員が作成したオープンな教材を、講義または自主学習で活用する</li> <li><input type="checkbox"/> 他大学等が提供するオープンな教材を講義で活用する</li> <li><input type="checkbox"/> 他大学等が提供するオープンな教材を自主学習で活用する</li> </ul> <p>担当教員の実務経験</p> <ul style="list-style-type: none"> <li><input type="checkbox"/> ある</li> </ul> <p>実務経験の内容</p>

講義科目名称： リハビリテーション教育学特論

授業コード： 276314

英文科目名称： Advanced Rehabilitation Education

開講期間	配当年	単位数	科目必選区分
後期	1	2	選択
担当教員			
池田 耕二 飯塚 照史			
		基盤科目	
添付ファイル			

授業の目標・概要	<p>新人教育が想定する卒後3年を目途に、理学療法士・作業療法士・言語聴覚士が医療専門職として修得しておくべき知識・技能および態度を考え、そこに至る過程を熟考し、学内教育および臨床実習教育が備える教育内容を理解する。同時に、指定規則改変（2022年）に伴う診療参加型臨床実習の理念と方法を学修し、学内教育と現場教育のシームレス化を考察し、その方法を検討する。また、各施設の現状を理解し、理学療法士および作業療法士の現場教育を振り返るとともに、それに必要な教育知識や技術を検討し、現場教育における支援方法を学修する。</p>		
学習の到達目標	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 理学療法士・作業療法士教育カリキュラムの現状と課題を理解する。</li> <li>2. 臨床実習教育前・後における到達目標を提案できる。</li> <li>3. 診療参加型臨床実習の理念と方法を理解する。</li> <li>4. 現場教育の課題を抽出できる。</li> <li>5. 現場教育の支援方法を提案できる。</li> </ol>		
授業方法・形式	講義		
授業計画	第1回	授業ガイダンス・リハビリテーション教育の現状（池田）	
	第2回	リハビリテーション養成校における学内教育カリキュラムの現状（池田）	
	第3回	リハビリテーション養成校における学内教育カリキュラムとその課題（飯塚）	
	第4回	学内教育カリキュラムの立案（飯塚）	
	第5回	リハビリテーション専門基礎科目・専門科目における講義の課題（飯塚）	
	第6回	リハビリテーション専門基礎科目・専門科目における講義方法の提案（飯塚）	
	第7回	臨床実習教育・前の到達目標の設定（飯塚）	
	第8回	診療参加型臨床実習の理念と方法（池田）	
	第9回	臨床実習教育におけるプログラムの立案①（池田）	
	第10回	臨床実習教育におけるプログラムの立案②（池田）	
	第11回	臨床実習教育・後の到達目標の設定と対応（池田）	
	第12回	新人療法士に対する到達目標設定と対応（池田）	
	第13回	新人療法士に対する現場教育の課題抽出と教育支援方法の立案（池田）	
	第14回	中堅・熟達療法士に対する現場教育の課題と教育支援方法の立案（池田）	
	第15回	現場教育と組織（管理）向上力（池田）	
成績評価の基準	<p>複数の講義内容のまとめりに課す小レポートまたは討議への参加態度と発言内容（40%）          期末レポート課題（60%）</p>		
課題（試験やレポート等）に対するフィードバックの方法			
準備学習・復習及び授業時間外の課題	<p>（事前学習） 関連書籍に目を通しておくこと。          （事後学習） 毎回の授業内容に関する課題をまとめておくこと。</p>		
履修上のアドバイス及び留意点			

教材・教科書	毎回の授業で資料を配布する。
参考書	<ul style="list-style-type: none"> <li>・「リハビリテーション専門職のための教育学 現場で役立つ教える技術」丸山仁司・堀本ゆかり編、医歯薬出版（2021）</li> <li>・「セラピスト教育のための臨床的・クラークシップのすすめ 第3版」中川法一編、三輪書店（2019）</li> <li>・「医療プロフェッショナルの経験学習」松尾睦編、同文館出版（2018）</li> </ul>
授業の特徴	<p>授業で実践するアクティブ・ラーニング</p> <ul style="list-style-type: none"> <li><input type="checkbox"/> PBL（課題解決型学習）</li> <li><input type="checkbox"/> 反転授業（知識習得を教室外、知識確認等を教室で行う授業）</li> <li><input checked="" type="checkbox"/> ディスカッション、ディベート</li> <li><input checked="" type="checkbox"/> グループワーク</li> <li><input checked="" type="checkbox"/> プレゼンテーション</li> <li><input type="checkbox"/> 実習、フィールドワーク</li> <li><input type="checkbox"/> その他</li> </ul> <p>その他アクティブ・ラーニング内容</p> <p>授業でのICT活用</p> <ul style="list-style-type: none"> <li><input type="checkbox"/> 双方向型授業に活用する</li> <li><input type="checkbox"/> 自主学习支援に活用する</li> </ul> <p>オープンな教材</p> <ul style="list-style-type: none"> <li><input checked="" type="checkbox"/> 担当教員が作成したオープンな教材を、講義または自主学习で活用する</li> <li><input type="checkbox"/> 他大学等が提供するオープンな教材を講義で活用する</li> <li><input type="checkbox"/> 他大学等が提供するオープンな教材を自主学习で活用する</li> </ul> <p>担当教員の実務経験</p> <ul style="list-style-type: none"> <li><input type="checkbox"/> ある</li> </ul> <p>実務経験の内容</p> <p>この科目は、地域でのリハビリテーションの実務経験を有する教員が、その経験を活かして教育する科目です。</p>

講義科目名称： 医療管理特論

授業コード：

英文科目名称： Advanced Medical Management

開講期間	配当年	単位数	科目必選区分
後期	1	2	選択
担当教員			
上野 栄一 西菌 貞子			
添付ファイル			

授業の目標・概要	変化し続ける社会・医療情勢の中で、保健・医療・福祉に関わる組織と業務はより多様で複雑化している。医療機関は、医療制度の現状と動向を視野に入れた広い観点から利用者に良質な医療を提供するとともに、それぞれの組織と業務のシステムにおいては各従事者の健康と安全・成長を確保するための配慮が求められる。本講義では、医療現場におけるコミュニケーション、リーダーシップ、状況認識、意思決定など医療安全と組織マネジメントに必要な基礎理論を踏まえて、医療現場でリーダーシップを発揮し、組織を健全にマネジメントできるリハビリテーション専門職として役割を遂行できる能力の向上を目指す。		
学習の到達目標	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 保健医療制度の変遷を理解し、質の良い医療サービスを提供するために求められる現状課題を説明できる。</li> <li>2. 保健医療構成するメンバーシップと役割責務について説明できる。</li> <li>3. 保健医療提供と組織機能について、人材、資金などの視点から説明できる。</li> <li>4. 医療サービスにおける継続的な質向上の必要性を踏まえ、これらを担う専門職者としての自己の役割について論述できる。</li> </ol>		
授業方法・形式	講義		
授業計画	第1回	わが国における保健・医療・福祉制度の現状と動向	(上野)
	第2回	医療管理の歴史と定義 (上野)	
	第3回	医療サービスのマネジメントの特徴と実態 (上野)	
	第4回	安全管理とリスクマネジメント	(上野)
	第5回	職場のメンタルヘルスとヘルスマネジメントの方法 (上野)	
	第6回	職業倫理とプロフェッショナリズム	(上野)
	第7回	地域包括ケアシステムにおける管理・運営の特徴	(上野)
	第8回	地域包括ケアシステムにおける管理・運営とマネジメントの方法	(上野)
	第9回	組織変革とリーダーシップ (上野)	
	第10回	組織におけるキャリア・サイクル	(上野)
	第11回	キャリア・アンカーとキャリアプラン	(上野)
	第12回	サービスの質と組織で働く人たちの能力育成 (西菌)	
	第13回	組織におけるキャリア開発 社会への所属人材としての自己課題 (西菌)	
	第14回	保健医療を取り巻く状況と質の高い組織づくり (西菌)	
	第15回	医療管理における今後の展望と課題	(上野)
成績評価の基準	<p>授業の理解度を確認するために重要な主題ごとに課する小課題レポート (40%)                  授業全体の到達度の確認をする期末レポート課題 (60%)</p>		

課題（試験やレポート等）に対するフィードバックの方法	
準備学習・復習及び授業時間外の課題	(事前学習) 関連書籍に目を通しておくこと。 (事後学習) 毎回の授業内容の要点をまとめておくこと。
履修上のアドバイス及び留意点	
教材・教科書	授業に必要な資料を配布する。
参考書	<ul style="list-style-type: none"> <li>・「医療管理 病院のあり方を原点からひもとく」池上直己 著、医学書院 (2018)</li> <li>・「『病院』の教科書」今中雄一 著、医学書院 (2010)</li> <li>・「チーム医療の中のリハ医のリーダーシップ - 様々なチームシチュエーション -」岡本隆嗣 編、全日本病院出版会 (2018)</li> <li>・「生命倫理と医療倫理」伏木信次ほか 編、金芳堂 (2014)</li> <li>・「48 のケースで学ぶ職業倫理 意思決定の手法と実践」レイモンド・S. ファイファーほか 著、高田一樹 訳、センテージラーニング (2014)</li> </ul>
授業の特徴	<p>授業で実践するアクティブ・ラーニング</p> <ul style="list-style-type: none"> <li><input type="checkbox"/> PBL (課題解決型学習)</li> <li><input type="checkbox"/> 反転授業 (知識習得を教室外、知識確認等を教室で行う授業)</li> <li><input type="checkbox"/> ディスカッション、ディベート</li> <li><input type="checkbox"/> グループワーク</li> <li><input checked="" type="checkbox"/> プレゼンテーション</li> <li><input type="checkbox"/> 実習、フィールドワーク</li> <li><input type="checkbox"/> その他</li> </ul> <p>その他アクティブ・ラーニング内容</p> <p>授業でのICT活用</p> <ul style="list-style-type: none"> <li><input type="checkbox"/> 双方向型授業に活用する</li> <li><input type="checkbox"/> 自主学習支援に活用する</li> </ul> <p>オープンな教材</p> <ul style="list-style-type: none"> <li><input type="checkbox"/> 担当教員が作成したオープンな教材を、講義または自主学習で活用する</li> <li><input type="checkbox"/> 他大学等が提供するオープンな教材を講義で活用する</li> <li><input type="checkbox"/> 他大学等が提供するオープンな教材を自主学習で活用する</li> </ul> <p>担当教員の実務経験</p> <ul style="list-style-type: none"> <li><input type="checkbox"/> ある</li> </ul> <p>実務経験の内容</p>



	第15回 アカデミックライティング7：考察の作成（先行研究との比較・結語） （城野）
成績評価の基準	複数の授業のまとめりに理解度を確認するための小テストまたは小レポート(40%) 期末レポート課題(60%)
課題（試験やレポート等）に対するフィードバックの方法	個別にフィードバックを行う。
準備学習・復習及び授業時間外の課題	（事前学習）関連書籍に目を通しておくこと。 （事後学習）毎回の授業内容の要点をノートにまとめておくこと。
履修上のアドバイス及び留意点	できるだけ多くの論文を読んでおくこと。
教材・教科書	毎回の授業で資料を配布する。
参考書	<ul style="list-style-type: none"> <li>・「PT・OT のための臨床研究はじめの一步」山田 実（編著）、羊土社（2016）</li> <li>・「エビデンスをつくる 随りやすい臨床研究のピットフォール」川村 孝 著、医学書院（2003）</li> <li>・「アカデミック・ライティングの基礎：資料を活用して論理的な文章を書く」西川真理子ほか 著、晃洋書房（2017）</li> <li>・「はじめて学ぶ文献レビュー」若村智子・西村舞琴 編著、総合医学社（2020）</li> </ul>
授業の特徴	<p>授業で実践するアクティブ・ラーニング</p> <ul style="list-style-type: none"> <li><input type="checkbox"/> PBL（課題解決型学習）</li> <li><input type="checkbox"/> 反転授業（知識習得を教室外、知識確認等を教室で行う授業）</li> <li><input checked="" type="checkbox"/> ディスカッション、ディベート</li> <li><input type="checkbox"/> グループワーク</li> <li><input checked="" type="checkbox"/> プレゼンテーション</li> <li><input type="checkbox"/> 実習、フィールドワーク</li> <li><input type="checkbox"/> その他</li> </ul> <p>その他アクティブ・ラーニング内容</p> <p>授業でのICT活用</p> <ul style="list-style-type: none"> <li><input type="checkbox"/> 双方向型授業に活用する</li> <li><input type="checkbox"/> 自主学習支援に活用する</li> </ul> <p>オープンな教材</p> <ul style="list-style-type: none"> <li><input type="checkbox"/> 担当教員が作成したオープンな教材を、講義または自主学習で活用する</li> <li><input type="checkbox"/> 他大学等が提供するオープンな教材を講義で活用する</li> <li><input type="checkbox"/> 他大学等が提供するオープンな教材を自主学習で活用する</li> </ul> <p>担当教員の実務経験</p> <ul style="list-style-type: none"> <li><input checked="" type="checkbox"/> ある</li> </ul> <p>実務経験の内容</p> <p>この科目は、研究論文執筆の実務経験を有する教員が、その経験を活かして教育する科目です。</p>

開講期間	配当年	単位数	科目必選区分
前期	1	2	必修
担当教員			
西川 隆 辻下 守弘 伊藤 健一 藤田 信子			
土2			
添付ファイル			

授業の目標・概要	<p>学術研究に携わる者が果たすべき責任とは何かという問いに、受講者が自ら答えを出すことができることを目的に、基本的人権や医療倫理、生命倫理という広い観点から問題を説き起こし、学術研究における公正性と責任ある研究活動にいたるまでを多様な視点から検討する。さらに、研究の計画から遂行、成果発表や査読にいたるまでのプロセスにおいて、研究者が果たすべき役割と責任について、教員がこれまで行ってきた研究活動の具体的事例をまじえながら授業を進める。特に、研究を実施する上で重要となる研究倫理審査を受審する上で備えるべき研究の倫理的配慮について教授する。</p>		
学習の到達目標	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 基本的人権、医療倫理、生命倫理、臨床倫理の基本的概念を理解し、説明できる。</li> <li>2. 学術研究における研究者の自由と倫理的責務を理解し、説明できる。</li> <li>3. 人および動物を対象とする医療系研究における倫理的諸概念を理解し、説明できる。</li> <li>4. 研究倫理審査の制度と組織、手続きを理解し、説明できる。</li> <li>5. 研究不正の諸概念と現行の罰則規程の意義を理解し、説明できる。</li> </ol>		
授業方法・形式	講義		
授業計画	第1回	緒論 基本的人権の思想と歴史的背景 (西川)	
	第2回	医療倫理の理念と歴史的背景 (西川)	(西)
	第3回	生命倫理の理念と歴史的背景 (西川)	(西)
	第4回	臨床における倫理的観点と諸問題	(伊藤)
	第5回	学術研究の社会的意義と研究者の自由ならびに倫理的責任	(伊藤)
	第6回	人を対象とする医学系研究における倫理的観点と諸概念	(伊藤)
	第7回	動物を対象とする医学系研究における倫理的観点と諸概念	(伊藤)
	第8回	研究倫理審査の制度と組織および手続きの概観	(辻下)
	第9回	研究倫理審査を受審する上で前提となる要件	(辻下)
	第10回	研究倫理審査における諸問題の実例	(辻下)
	第11回	研究不正の諸概念と実例の検討、および現行の罰則規程	(辻下)
	第12回	公正で責任ある研究活動の計画と遂行に関する倫理的諸問題の検討	(藤田)
	第13回	研究成果の公表に関する倫理的諸問題の検討	(藤田)
	第14回	研究論文の執筆、投稿と査読過程における倫理的諸問題の検討	(藤田)
	第15回	総括 再び基本的人権の観点から研究活動の自由と遵守すべき倫理的事項を振り返る (西川)	
成績評価の基準	担当教員ごとに授業の理解度を確認する筆記試験または課題レポート (4人の各教員25%)		
課題 (試験やレポート等) に対するフィードバックの方法			
準備学習・復習及び授業時間外の課題	<p>(事前学習) 事前の配布資料に目を通しておく。 (事後学習) 毎回の授業内容の要点をまとめておく。</p>		

履修上のアドバイス及び留意点	
教材・教科書	毎回の授業の前週までに授業で用いる資料を配布する。
参考書	<ul style="list-style-type: none"> <li>・「人権の思想史（歴史文化ライブラリー）」 浜林正夫 著、吉川弘文館（1999）</li> <li>・「医療倫理学の方法 第3版：原則・ナラティブ・手順」 宮坂道夫 著、医学書院（2016）</li> <li>・「医学・生命科学の研究倫理ハンドブック」 神里彩子、武藤香織 編、東京大学出版会（2015）</li> <li>・「人を対象とする生命科学・医学系研究に関する倫理指針ハンドブック」 薬事日報社（2021）</li> <li>・「医療現場における調査研究倫理ハンドブック」 玉腰暁子、武藤香織 著、医学書院（2011）その他、適宜授業で紹介する。</li> </ul>
授業の特徴	<p>授業で実践するアクティブ・ラーニング</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>■ PBL（課題解決型学習）</li> <li>■ 反転授業（知識習得を教室外、知識確認等を教室で行う授業）</li> <li>■ ディスカッション、ディベート</li> <li>■ グループワーク</li> <li>■ プレゼンテーション</li> <li>□ 実習、フィールドワーク</li> <li>□ その他</li> </ul> <p>その他アクティブ・ラーニング内容</p> <p>授業でのICT活用</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>■ 双方向型授業に活用する</li> <li>□ 自主学习支援に活用する</li> </ul> <p>オープンな教材</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>□ 担当教員が作成したオープンな教材を、講義または自主学习で活用する</li> <li>□ 他大学等が提供するオープンな教材を講義で活用する</li> <li>□ 他大学等が提供するオープンな教材を自主学习で活用する</li> </ul> <p>担当教員の実務経験</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>■ ある</li> </ul> <p>実務経験の内容</p> <p>病院にて医師、理学療法士としての臨床経験を有する。</p>

講義科目名称： 統計解析特論

授業コード：

英文科目名称： Advanced Statistical Analysis

開講期間	配当年	単位数	科目必選区分
後期	1	2	選択
担当教員			
大浦 智子 阿波 邦彦			
添付ファイル			

授業の目標・概要	<p>学術研究とは実証的な研究であり、それを正しく遂行するためには、統計に関する理解が必要不可欠となる。本科目では、リハビリテーション学領域の実証研究において用いられる主な統計解析手法を取り上げ、その統計分析が何を意味するのかあるいはどのような場合に使うべきなのかを解説する。また、具体的な研究事例を提示しながらSPSSなどの統計ソフトウェアを用いた統計解析を提示することにより、自らの研究課題に適用する統計解析手法をイメージできるような授業を展開する。</p>		
学習の到達目標	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. データの種類について説明することが出来る。</li> <li>2. データの種類に応じた統計解析の方法について説明することが出来る。</li> <li>3. 研究デザインに応じた解析方法を選択することが出来る。</li> <li>4. 統計解析結果に対する解釈が出来る。</li> </ol>		
授業方法・形式	講義		
授業計画	第1回	研究データの種類と特徴（尺度・分布）	（阿波）
	第2回	統計解析の流れ：統計解析の選択・統計ソフトウェアの種類と特徴	（阿波）
	第3回	統計解析を用いた研究1：先行研究における解析と解釈（比較・相関）	（阿波）
	第4回	統計解析を用いた研究2：先行研究における解析と解釈（因子分析・ロジスティック）	（大浦）
	第5回	統計解析を用いた研究3：先行研究における解析と解釈（質的データ・テキストマイニング）	（大浦）
	第6回	統計解析の講義と演習1：群間比較	（阿波）
	第7回	統計解析の講義と演習2：結果の示し方（群間比較）	（阿波）
	第8回	統計解析の講義と演習3：相関	（阿波）
	第9回	統計解析の講義と演習4：結果の示し方（相関）	（阿波）
	第10回	統計解析の講義と演習5：因子分析	（大浦）
	第11回	統計解析の講義と演習6：結果の示し方（因子分析）	（大浦）
	第12回	統計解析の講義と演習7：ロジスティック解析	（大浦）
	第13回	統計解析の講義と演習8：結果の示し方（ロジスティック解析）	（大浦）
	第14回	統計解析の講義と演習9：テキストマイニング	（大浦）
	第15回	研究疑問に対する統計解析計画	（大浦・阿波）
成績評価の基準	毎回の授業内容の理解度を確認する筆記課題あるいはクイズ形式の課題(40%) 期末試験(60%)		
課題（試験やレポート等）に対するフィードバックの方法			
準備学習・復習及び授業時間外の課題	<p>（事前学習） 関連書籍に目を通しておくこと。          （事後学習） 毎回の授業内容に関する課題をまとめておくこと。</p>		
履修上のアドバイス及び留意点			

教材・教科書	必要に応じて配布する。
参考書	<ul style="list-style-type: none"> <li>・「臨床研究の教科書 第2版: 研究デザインとデータ処理のポイント」川村孝 著、医学書院(2020)</li> <li>・「医学的介入の研究デザインと統計: ランダム化/非ランダム化研究から傾向スコア、操作変数法まで」木原雅子、木原正博 訳、メディカルサイエンスインターナショナル (2013)</li> <li>・「臨床データの信頼性と妥当性」SKETCH 研究会統計分科会 著、楠正 監、サイエンティスト社(2005)</li> </ul>
授業の特徴	<p>授業で実践するアクティブ・ラーニング</p> <ul style="list-style-type: none"> <li><input type="checkbox"/> PBL (課題解決型学習)</li> <li><input checked="" type="checkbox"/> 反転授業 (知識習得を教室外、知識確認等を教室で行う授業)</li> <li><input type="checkbox"/> ディスカッション、ディベート</li> <li><input type="checkbox"/> グループワーク</li> <li><input type="checkbox"/> プレゼンテーション</li> <li><input type="checkbox"/> 実習、フィールドワーク</li> <li><input type="checkbox"/> その他</li> </ul> <p>その他アクティブ・ラーニング内容</p> <p>授業でのICT活用</p> <ul style="list-style-type: none"> <li><input type="checkbox"/> 双方向型授業に活用する</li> <li><input checked="" type="checkbox"/> 自主学習支援に活用する</li> </ul> <p>オープンな教材</p> <ul style="list-style-type: none"> <li><input type="checkbox"/> 担当教員が作成したオープンな教材を、講義または自主学習で活用する</li> <li><input type="checkbox"/> 他大学等が提供するオープンな教材を講義で活用する</li> <li><input type="checkbox"/> 他大学等が提供するオープンな教材を自主学習で活用する</li> </ul> <p>担当教員の実務経験</p> <ul style="list-style-type: none"> <li><input type="checkbox"/> ある</li> </ul> <p>実務経験の内容</p>

開講期間	配当年	単位数	科目必選区分
前期	1	2	選択
担当教員			
安西 将也			
木 6		基盤科目	
添付ファイル			

授業の目標・概要	本科目では、はじめにわが国の社会環境と健康概念を理解する。また、現在推進されている保健医療政策「健康日本21」を支えている社会保障の諸制度（社会保険、社会福祉、公的扶助、公衆衛生の諸制度）を概説した上で、医療制度の現代的意味と医療制度の新しい展望についての理解を深める。また、21世紀の保健医療政策が国民の多様な健康状態を支える保健・医療の機能の推進に対し、どのような課題に直面し、高度専門職の役割はどのような方向を目指すべきかについて論じる。さいごに、保健・医療経済学的な観点から保健・医療を評価する方法とその適用限界、そして保健・医療供給体制と地域包括ケアシステムの在り方などについて教授する。
学習の到達目標	1. 現在進められている保健医療政策「健康日本21」の主要な目的と諸課題を理解し、説明できる。 2. わが国の社会保障制度の概要とその一環としての医療制度、介護保険制度、障害者支援制度について理解し、説明できる。 3. 保健・医療経済学的見地から保健・医療の評価方法の在り方について理解し、説明できる。 4. 地域包括ケアシステムの意義と概要を理解し、説明できる。 5. 今後の保健・医療政策におけるリハビリテーション専門職者の役割と課題を考えることができる。
授業方法・形式	講義
授業計画	<p>第1回 わが国の社会環境と健康概念</p> <p>第2回 わが国の人口問題（人口静態統計、人口動態統計、生命表）</p> <p>第3回 わが国の傷病の推移と傷病の主な発症要因</p> <p>第4回 健康日本21計画の目標と諸課題（ヘルスプロモーションを中心とした健康政策）</p> <p>第5回 特定健診・特定保健指導制度とその現状および課題（ポピュレーション・アプローチ、ハイリスク・アプローチ）</p> <p>第6回 わが国の社会保障制度の概説（社会保険制度、社会福祉制度、公的扶助制度、公衆衛生）</p> <p>第7回 ① わが国の社会保険制度（医療保険制度、後期高齢者医療制度、特定疾患医療制度）</p> <p>第8回 ② わが国の社会保険制度（介護保険制度、介護予防、地域支援事業）</p> <p>第9回 わが国の社会福祉制度（生活保護法、児童福祉法、障害者福祉法などの福祉六法）</p> <p>第10回 わが国の国民医療費・診療医療費の動向と課題</p> <p>第11回 ① 保健・医療経済学視点からの社会保険制度とその評価方法（医療保険サービスとその医療費）</p> <p>第12回 ② 保健・医療経済学視点からの社会保険制度とその評価方法（介護保険サービスとその介護給付費）</p> <p>第13回 わが国における地域保健医療構想と地域包括ケアシステム（医療、介護、予防、住まい、生活支援と多職種協働）</p> <p>第14回 わが国の保健・医療・介護供給体制と専門職</p> <p>第15回 今後の保健医療政策におけるリハビリテーション専門職の役割と課題</p>
成績評価の基準	各回の授業の理解度を確認する筆記課題（50%） 授業全体の到達度を確認する最終レポート（50%）
課題（試験やレポート等）に対するフィードバック	

の方法	
準備学習・復習及び授業時間外の課題	(事前学習) 事前の配布資料に目を通しておく。 (事後学習) 毎回の授業内容に関する筆記課題を提出する。
履修上のアドバイス及び留意点	
教材・教科書	特に指定はしない。毎回の授業で学術論文等の資料を配布する。
参考書	<ul style="list-style-type: none"> <li>・「社会・環境と健康 2022-2023 改訂第 7 版」国立研究開発法人 医薬基盤・健康・栄養研究所 監修、南江堂 (2022)</li> <li>・「国民衛生の動向 2022/2023」厚生労働統計協会 編集・発行 (2022)</li> <li>・「国民の福祉と介護の動向 2022/2023」厚生労働統計協会 編集・発行 (2022)</li> </ul>
授業の特徴	<p>授業で実践するアクティブ・ラーニング</p> <ul style="list-style-type: none"> <li><input type="checkbox"/> PBL (課題解決型学習)</li> <li><input type="checkbox"/> 反転授業 (知識習得を教室外、知識確認等を教室で行う授業)</li> <li><input type="checkbox"/> ディスカッション、ディベート</li> <li><input type="checkbox"/> グループワーク</li> <li><input type="checkbox"/> プレゼンテーション</li> <li><input type="checkbox"/> 実習、フィールドワーク</li> <li><input type="checkbox"/> その他</li> </ul> <p>その他アクティブ・ラーニング内容</p> <p>授業でのICT活用</p> <ul style="list-style-type: none"> <li><input type="checkbox"/> 双方向型授業に活用する</li> <li><input type="checkbox"/> 自主学習支援に活用する</li> </ul> <p>オープンな教材</p> <ul style="list-style-type: none"> <li><input type="checkbox"/> 担当教員が作成したオープンな教材を、講義または自主学習で活用する</li> <li><input type="checkbox"/> 他大学等が提供するオープンな教材を講義で活用する</li> <li><input type="checkbox"/> 他大学等が提供するオープンな教材を自主学習で活用する</li> </ul> <p>担当教員の実務経験</p> <ul style="list-style-type: none"> <li><input type="checkbox"/> ある</li> </ul> <p>実務経験の内容</p>

開講期間	配当年	単位数	科目必選区分
前期	1	2	必修
担当教員			
西川 隆 吉川 義之 中島 大貴 中島 栄之介 豊岡 祐子			
土1			
添付ファイル			

授業の目標・概要	多様な状況の対象者に保健・医療・福祉サービスを提供するための専門職間連携について、その理念と各現場での実践の経緯を学ぶとともに、現在推し進められている地域包括ケアシステムを中心に、現状の課題と将来の方向性を検討する。その中で、医学的視点だけでなく、対象者の心理的・社会的な視点にも配慮した専門職種間の有機的な連携と協業についての実践的知識および連携のためのマネジメントについて、看護師、理学療法士、作業療法士、言語聴覚士、介護支援専門員それぞれの専門的立場から多面的に考察し、多職種連携が果たす役割や機能について教授する。さらに各地域の特色を生かした地域包括ケアシステムの実例を検討することにより、将来受講者がそれぞれの生活地域で専門職間連携の一翼を担いうる能力を養成する。		
学習の到達目標	1. チーム医療、特別支援教育、地域包括ケアシステムにおいて展開されてきた専門職間連携の理念と経緯の概要を理解し、説明できる 2. 地域包括ケアシステムにおける各専門職の役割と必要性を説明できる。 3. 地域包括ケアシステムにおける専門職間連携の意義を説明できる。 4. 対象となる障害の種類と地域の特性を考慮した専門職間連携の計画を作成できる。		
授業方法・形式	講義		
授業計画	第1回	医療・保健・福祉における専門職間連携の理念と歴史の概観	(西川)
	第2回	チーム医療と多職種連携教育に関する諸理論	(西川)
	第3回	特別支援教育における多職種連携	(中島栄之介)
	第4回	地域包括ケアシステムの概要と意義 各職種の役割と連携の概要 (吉川)	
	第5回	地域包括ケアシステムにおける看護師の役割と実践例	(豊岡)
	第6回	地域包括ケアシステムにおける作業療法士の役割と実践例	(中島大貴)
	第7回	地域包括ケアシステムにおける理学療法士の役割と実践例	(吉川)
	第8回	地域包括ケアシステムにおける言語聴覚士の役割と実践例	(中島栄之介)
	第9回	地域包括ケアシステムにおける介護支援専門員の役割と実践例	(豊岡)
	第10回	地域包括ケアシステムにおける医師の役割と実践例	(西川)
	第11回	都市部または過疎・高齢化地域における地域包括ケアシステム構築の実例	(中島大貴)
	第12回	児童・発達障害を対象とした地域包括ケアシステム構築の実例	(中島栄之介)
	第13回	奈良市登美ヶ丘地域包括支援センターの活動の地域的特性の検討	(中島大貴)
	第14回	各受講者が居住する地域の地域包括支援センターの地域的特性の検討	(吉川)
	第15回	各受講者が居住する地域での地域包括ケアシステムにおける専門職間連携の実施計画作成 (吉川)	(吉川)
成績評価の基準	毎回の授業の理解度を確認する筆記課題 (60%) 授業全体の到達度を確認する最終レポート (40%)		
課題 (試験やレポート等) に対するフィードバックの方法			

準備学習・復習及び授業時間外の課題	(事前学習) 事前に配布する資料に目を通し、各回の授業の目的と内容を把握して授業に臨むこと。 (事後学習) 各回の授業内容まとめておき、適宜与えられる課題を提出すること。
履修上のアドバイス及び留意点	
教材・教科書	毎回の授業の前週までに授業で用いる資料を配布する。
参考書	「事例を通じて、我がまちの地域包括ケアを考えよう『地域包括ケアシステム』事例集成 ～できること探しの素材集～」、日本総合研究所、2014、(厚生労働省ホームページでも公表) <a href="https://www.mhlw.go.jp/seisakunitsuite/bunya/hukushi_kaigo/kaigo_koureisha/chiiki-houkatsu/dl/jirei.pdf">https://www.mhlw.go.jp/seisakunitsuite/bunya/hukushi_kaigo/kaigo_koureisha/chiiki-houkatsu/dl/jirei.pdf</a> その他、適宜授業で紹介する。
授業の特徴	<p>授業で実践するアクティブ・ラーニング</p> <ul style="list-style-type: none"> <li><input type="checkbox"/> PBL (課題解決型学習)</li> <li><input type="checkbox"/> 反転授業 (知識習得を教室外、知識確認等を教室で行う授業)</li> <li><input type="checkbox"/> ディスカッション、ディベート</li> <li><input checked="" type="checkbox"/> グループワーク</li> <li><input checked="" type="checkbox"/> プレゼンテーション</li> <li><input type="checkbox"/> 実習、フィールドワーク</li> <li><input type="checkbox"/> その他</li> </ul> <p>その他アクティブ・ラーニング内容</p> <p>授業でのICT活用</p> <ul style="list-style-type: none"> <li><input type="checkbox"/> 双方向型授業に活用する</li> <li><input type="checkbox"/> 自主学習支援に活用する</li> </ul> <p>オープンな教材</p> <ul style="list-style-type: none"> <li><input checked="" type="checkbox"/> 担当教員が作成したオープンな教材を、講義または自主学習で活用する</li> <li><input type="checkbox"/> 他大学等が提供するオープンな教材を講義で活用する</li> <li><input type="checkbox"/> 他大学等が提供するオープンな教材を自主学習で活用する</li> </ul> <p>担当教員の実務経験</p> <ul style="list-style-type: none"> <li><input checked="" type="checkbox"/> ある</li> </ul> <p>実務経験の内容</p>

講義科目名称： リハビリテーション技術特論

授業コード：

英文科目名称： Advanced Rehabilitation Technology

開講期間	配当年	単位数	科目必選区分
後期	1	1	選択
担当教員			
辻下 守弘 長嶋 洋一 小貫 睦巳			
添付ファイル			

授業の目標・概要	近年のICT（情報通信技術）の発展に伴い、リハビリテーション医療のDX化（データ・デジタル化）が急速に発展している。従来のリハビリテーションでは、セラピストの知識や経験に依存して治療が行われてきたが、先端技術を併用すればセラピストの技量を超越してより効果的なリハビリテーション医療を実践できると考えられている。本授業では、リハビリテーションの主たる対象者である高齢者に対して最先端技術であるバーチャルリアリティー技術や生体センサー技術を応用した新しいリハビリテーションの理論と臨床研究について論じた上で、リハビリテーションにおける先端計測技術の応用の実際を体感する。また先端技術と療法士の接点を学び、リハビリテーションの今後の発展と課題、先端技術のリハビリテーション応用の可能性について学修する。
学習の到達目標	1. 歩行分析における力学的データと運動学的データの意義について説明できる。 2. 基本的な時系列データのプロットができる。 3. 長期計測データを解析するための基本的なスクリプト言語を説明できる。 4. 生体センサーやバーチャルリアリティー技術を応用したリハビリテーション技術と療法士が担う今後の役割について議論できる。
授業方法・形式	講義
授業計画	<p>第1回 総論：先端IT技術が我々の世界とリハビリテーションにもたらすもの（長嶋）</p> <p>第2回 生体センサー技術の応用を学ぶための基礎知識1：力学的データと運動学的データ 床反力計と三次元動作解析装置を用いた歩行動作分析の実際（辻下）</p> <p>第3回 生体センサー技術の応用を学ぶための基礎知識2：データのプロット 時系列データをグラフ表示して歩行動作を検証する（辻下）</p> <p>第4回 バーチャルリアリティー技術のシステム構成要素について学び医療機器・システムの特性を理解する（小貫）</p> <p>第5回 バーチャルリアリティー技術の臨床応用：高齢者の運動機能向上を目的としたバーチャルリアリティー技術の応用を体験する（小貫）</p> <p>第6回 生体センサー（筋電図）の計測データ解析のためのプログラミング入門（長嶋）</p> <p>第7回 筋電図データを用いたバイオフィードバックシステム開発のためのプログラミング入門（長嶋）</p> <p>第8回 まとめ 先端IT技術を応用した新たなリハビリテーション技術開発に関する議論（長嶋・小貫・辻下）</p>
成績評価の基準	各回の授業の理解度を確認する筆記課題あるいはクイズ形式の課題（50%） 授業で提示されたデータ解析に関するレポート課題（50%）
課題（試験やレポート等）に対するフィードバックの方法	
準備学習・復習及び授業時間外の課題	（事前学習）事前に参考書や関連書籍に目を通しておくこと。 （事後学習）毎回の授業内容に関する資料を復習しておくこと。
履修上のアドバイス及び留意点	
教材・教科書	テキストは特に指定しないが、科目担当教員が作成した資料を授業時に配布する。
参考書	・「はじめの MATLAB」北村達也 著、近代科学者（2016） ・「Unity の教科書」北村愛美 著、SB クリエイティブ（2021）他の文献は適宜授業で紹介する。 *自身のノート PC を持参することが望ましい。
授業の特徴	<p>授業で実践するアクティブ・ラーニング</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>■PBL（課題解決型学習）</li> <li>□反転授業（知識習得を教室外、知識確認等を教室で行う授業）</li> <li>■ディスカッション、ディベート</li> </ul>

- グループワーク
- プレゼンテーション
- 実習、フィールドワーク
- その他

その他アクティブ・ラーニング内容

授業でのICT活用

- 双方向型授業に活用する
- 自主学習支援に活用する

オープンな教材

- 担当教員が作成したオープンな教材を、講義または自主学習で活用する
- 他大学等が提供するオープンな教材を講義で活用する
- 他大学等が提供するオープンな教材を自主学習で活用する

担当教員の実務経験

- ある

実務経験の内容

病院にて理学療法士としての臨床経験を有する。

講義科目名称： リハビリテーション研究特論

授業コード：

英文科目名称： Advanced Rehabilitation Research

開講期間	配当年	単位数	科目必選区分
後期	1	2	選択
担当教員			
野中 紘士 吉川 義之			
添付ファイル			

授業の目標・概要	医学研究では、基礎研究を積み重ねながら臨床研究に応用し、その結果新たに生じた問題を再び基礎研究で裏付けていくという過程を繰り返しながら、新たな評価法や治療法の開発・発展が実現して行く。本科目では、リハビリテーション領域の基礎研究の意義と実験動物や培養細胞を用いた実験手法と組織学、生化学や生理学などの解析手法について学修する。授業では、リハビリテーション基礎研究特有の文献検索と先行研究レビュー、研究目的の明確化や研究計画作成、そして研究倫理の遵守など基本的な事項について、教員が行う実際の基礎研究に基づき理解を深める。		
学習の到達目標	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 基礎研究における研究倫理を説明できる。</li> <li>2. 基礎研究で多く用いられる方法論を説明できる。</li> <li>3. リハビリテーション領域における実践上の問題点から基礎研究の研究計画を作成できる。</li> </ol>		
授業方法・形式	講義		
授業計画	第1回	実験動物や培養細胞を用いた基礎研究の意義と倫理 (野中)	
	第2回	基礎研究における実験方法1 細胞培養 (吉川)	
	第3回	基礎研究における実験方法2 一般組織染色 (野中)	
	第4回	基礎研究における実験方法3 免疫組織染色 (野中)	
	第5回	基礎研究における実験方法4 ウェスタンブロット (野中)	
	第6回	基礎研究における実験方法5 RT-PCR (野中)	
	第7回	実験動物を用いた基礎研究の紹介 実験動物を用いた基礎研究の文献抄読 (野中)	
	第8回	培養細胞を用いた基礎研究の紹介 培養細胞を用いた基礎研究の文献抄読 (吉川)	
	第9回	培養細胞を用いた基礎研究の実践紹介1 物理的刺激と創傷治癒促進の基礎 (吉川)	
	第10回	培養細胞を用いた基礎研究の実践紹介2 創傷治癒促進のための最適物理的刺激性条件の探索 (吉川)	
	第11回	培養細胞を用いた基礎研究の実践紹介3 物理的刺激による創傷治癒促進効果のメカニズム探索 (吉川)	
	第12回	実践における問題点と基礎研究1 文献検索および先行研究レビューと実践における問題点の抽出 (野中・吉川)	
	第13回	実践における問題点と基礎研究2 研究目的の設定 (野中・吉川)	
	第14回	実践における問題点と基礎研究3 研究計画立案 (野中・吉川)	
	第15回	実践における問題点と基礎研究4 研究計画の発表とディスカッション (野中・吉川)	

成績評価の基準	各回の授業の理解度を確保する課題（50%）、作成した基礎研究の計画に関する評価（50%）
課題（試験やレポート等）に対するフィードバックの方法	
準備学習・復習及び授業時間外の課題	（事前学習）関連書籍に目を通しておくこと。 （事後学習）毎回の授業内容に関する課題をまとめておくこと。
履修上のアドバイス及び留意点	
教材・教科書	・「理学療法研究の進めかた：基礎から学ぶ研究のすべて」森山英樹 著、文光堂（2014） および、授業ごとに関連資料を配布する。
参考書	・「Essential 細胞生物学原書第5版」中村桂子 他 監訳、南江堂（2021） ・「イラストレイテッド ハーバー・生化学 原書30版」清水 孝雄 監訳、丸善（2016） ・「入門組織学改訂第2版」牛木辰男 著、南江堂（2013） その他適宜授業で紹介する。

授業の特徴	<p>授業で実践するアクティブ・ラーニング</p> <ul style="list-style-type: none"> <li><input type="checkbox"/> PBL（課題解決型学習）</li> <li><input type="checkbox"/> 反転授業（知識習得を教室外、知識確認等を教室で行う授業）</li> <li><input type="checkbox"/> ディスカッション、ディベート</li> <li><input checked="" type="checkbox"/> グループワーク</li> <li><input checked="" type="checkbox"/> プレゼンテーション</li> <li><input type="checkbox"/> 実習、フィールドワーク</li> <li><input type="checkbox"/> その他</li> </ul> <p>その他アクティブ・ラーニング内容</p> <p>授業でのICT活用</p> <ul style="list-style-type: none"> <li><input type="checkbox"/> 双方向型授業に活用する</li> <li><input type="checkbox"/> 自主学習支援に活用する</li> </ul> <p>オープンな教材</p> <ul style="list-style-type: none"> <li><input type="checkbox"/> 担当教員が作成したオープンな教材を、講義または自主学習で活用する</li> <li><input type="checkbox"/> 他大学等が提供するオープンな教材を講義で活用する</li> <li><input type="checkbox"/> 他大学等が提供するオープンな教材を自主学習で活用する</li> </ul> <p>担当教員の実務経験</p> <ul style="list-style-type: none"> <li><input checked="" type="checkbox"/> ある</li> </ul> <p>実務経験の内容</p> <p>理学療法士の実務経験のある教員が担当する。</p>
-------	--

講義科目名称： 運動機能障害リハビリテーション学特論

授業コード：

英文科目名称： Advanced Rehabilitation for Motor Dysfunction

開講期間	配当年	単位数	科目必選区分
後期	1	2	選択
担当教員			
橋本 雅至 飯塚 照史 藤田 信子			
添付ファイル			

授業の目標・概要	本科目では、主に運動器傷害(外傷、障害)や中枢・末梢神経の障害に起因する運動機能障害に対する客観的分析法の教授を通じて、それらの評価、治療手法に関する研究や研究課題について習得する。さらに、運動機能障害の発症予防、あるいは二次的な身体障害への対応について考察し、健全な日常生活や社会活動を視野に入れた健康寿命の延伸に資する予防的支援を提案できる能力を養う。		
学習の到達目標	1. 運動機能障害に対するリハビリテーションの現状と課題について説明できる。 2. 運動機能障害による問題に対する分析方法について説明できる。 3. 運動機能障害の二次的問題について説明できる。 4. 運動機能障害に対する予防的支援方法について議論できる。		
授業方法・形式	講義		
授業計画	第1回	上肢運動機能障害リハビリテーションにおける現状と課題	(飯塚)
	第2回	上肢運動機能障害に対する評価法①：各種機器による測定・分析	(飯塚)
	第3回	上肢運動機能障害に対する評価法②：患者立脚型評価による測定・分析	(飯塚)
	第4回	上肢運動機能障害に対する介入法	(飯塚)
	第5回	上肢運動機能障害に対する予防的支援	(飯塚)
	第6回	体幹・下肢の運動器傷害リハビリテーションにおける現状と課題	(橋本)
	第7回	体幹・下肢の運動器傷害に対する評価法①：機器による測定・分析	(橋本)
	第8回	体幹・下肢の運動器傷害に対する評価法②：荷重下での評価 (スポーツ傷害を含む) (橋本)	(橋本)
	第9回	体幹・下肢の運動器傷害に対する介入法	(橋本)
	第10回	体幹・下肢の運動器傷害に対する予防的支援	(橋本)
	第11回	運動制御に対するリハビリテーションにおける問題点・課題の抽出	(藤田)
	第12回	運動制御に対する評価法①：機器による測定・分析	(藤田)
	第13回	運動制御に対する評価法②：患者立脚型評価による測定・分析	(藤田)
	第14回	運動制御に対する介入法	(藤田)
	第15回	運動制御を利用した予防的支援	(藤田)
成績評価の基準	指導教員ごとに授業で提示する課題への討論の内容 (50%)、指導教員ごとのレポート課題 (50%)		
課題 (試験やレポート等) に対するフィードバックの方法			
準備学習・復習及び授業時間外の課題	(事前学習) 講義資料と関連書籍に目を通しておくこと。 (事後学習) 毎回の授業内容の要点を復習しておくこと。		
履修上のアドバイス及び留意点			
教材・教科書	講義で用いる資料を事前に配布する。		

<p>参考書</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・「臨床にいかす表面筋電図 セラピストのための動作分析手法」加藤浩、山本澄子 編、医学書院 (2020)</li> <li>・「臨床歩行計測入門」江原義弘、山本澄子 著、医歯薬出版 (2008)</li> <li>・「手 その機能と解剖 第6版」上羽康夫 著、金芳堂 (2021)</li> <li>・「モーターコントロール原著 5版」Anne Shumway-Cook、Marjorie H Woollacott 著、田中繁訳、医歯薬出版 (2020)</li> <li>・「姿勢と歩行 協調からひも解く」樋口貴広、建内宏重 著、三輪書店 (2015)</li> </ul>
<p>授業の特徴</p>	<p>授業で実践するアクティブ・ラーニング</p> <ul style="list-style-type: none"> <li><input type="checkbox"/> PBL (課題解決型学習)</li> <li><input type="checkbox"/> 反転授業 (知識習得を教室外、知識確認等を教室で行う授業)</li> <li><input checked="" type="checkbox"/> ディスカッション、ディベート</li> <li><input checked="" type="checkbox"/> グループワーク</li> <li><input checked="" type="checkbox"/> プレゼンテーション</li> <li><input type="checkbox"/> 実習、フィールドワーク</li> <li><input type="checkbox"/> その他</li> </ul> <p>その他アクティブ・ラーニング内容</p> <p>授業でのICT活用</p> <ul style="list-style-type: none"> <li><input type="checkbox"/> 双方向型授業に活用する</li> <li><input type="checkbox"/> 自主学習支援に活用する</li> </ul> <p>オープンな教材</p> <ul style="list-style-type: none"> <li><input checked="" type="checkbox"/> 担当教員が作成したオープンな教材を、講義または自主学習で活用する</li> <li><input type="checkbox"/> 他大学等が提供するオープンな教材を講義で活用する</li> <li><input type="checkbox"/> 他大学等が提供するオープンな教材を自主学習で活用する</li> </ul> <p>担当教員の実務経験</p> <ul style="list-style-type: none"> <li><input type="checkbox"/> ある</li> </ul> <p>実務経験の内容</p>

講義科目名称： 内部機能障害リハビリテーション学特論

授業コード：

英文科目名称： Advanced Rehabilitation for Cardiopulmonary & Metabolic disorders

開講期間	配当年	単位数	科目必選区分
後期	1	2	選択
担当教員			
伊藤 健一 阿波 邦彦 野中 紘士			
添付ファイル			

授業の目標・概要	本特論では内部機能障害領域における疑問や問題を自ら解決できる能力とリハビリテーションを科学的見地から考察できる高度理学療法士の育成を目的に授業を展開する。具体的にはEBMに基づく内部機能障害リハビリテーションについて解説し、併せてクリニカルクエスション（CQ）に対する文献レビューの演習を行う。さらに、CQの解決手法としての研究（臨床研究、観察研究、基礎研究）手法について教員がこれまでに行ってきた事例をまじえながら授業を行う。		
学習の到達目標	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 内部機能障害リハビリテーションのグローバル・スタンダードを説明できる。</li> <li>2. 内部機能障害リハビリテーションにおける疑問や問題の解決方法を説明できる。</li> <li>3. 文献レビューの結果から内部機能障害リハビリテーションに対する研究動向について説明できる。</li> <li>4. 内部機能障害リハビリテーションにおける問題解決を行うために必要な各種研究方法の特徴を説明できる。</li> </ol>		
授業方法・形式	講義		
授業計画	第1回	これからの内部障害リハビリテーション	(伊藤)
	第2回	内部機能障害リハビリテーションのグローバル・スタンダードとEBM	(伊藤)
	第3回	臨床の疑問点や問題点を解決するための文献レビュー	(伊藤)
	第4回	内部機能障害リハビリテーションにおける最新の研究：英文抄読（臨床研究）	(伊藤)
	第5回	内部機能障害リハビリテーションにおける最新の研究：英文抄読（観察研究）	(阿波)
	第6回	内部機能障害リハビリテーションにおける最新の研究：英文抄読（実験研究）	(野中)
	第7回	臨床の疑問や問題点を解決するための研究：内部機能障害リハビリテーションにおける臨床研究	(伊藤)
	第8回	内部機能障害リハビリテーションにおける臨床研究のデザインと計画	(伊藤)
	第9回	内部機能障害リハビリテーションにおける臨床研究の実際	(伊藤)
	第10回	内部機能障害リハビリテーションにおける観察研究	(阿波)
	第11回	内部機能障害リハビリテーションにおける観察研究のデザインと計画	(阿波)
	第12回	内部機能障害リハビリテーションにおける観察研究の実際	(阿波)
	第13回	内部機能障害リハビリテーションにおける実験研究	(野中)
	第14回	内部機能障害リハビリテーションにおける実験研究のデザインと計画	(野中)
	第15回	内部機能障害リハビリテーションにおける実験研究の実際	(野中)
成績評価の基準	各指導教員が課するレポート（60%）、毎回の授業で課する筆記課題（40%）		
課題（試験やレポート等）に対するフィードバックの方法	適時指示する		
準備学習・復習及び授業時間外の課題	<p>（事前学習） 関連書籍や文献に目を通しておくこと</p> <p>（事後学習） 毎回の授業内容に関する課題をまとめておくこと</p>		

履修上のアドバイス及び留意点	
教材・教科書	適時資料を配布する
参考書	<ul style="list-style-type: none"> <li>・「臨床研究の教科書 第2版」川村孝 著、医学書院 (2020)</li> <li>・「理学療法ガイドライン第2版」日本理学療法士協会 編、医学書院 (2021)</li> <li>・「ウエスト呼吸生理学入門 疾患肺編」堀江孝至、メディカル・サイエンス・インターナショナル (2018)</li> </ul>
授業の特徴	<p>授業で実践するアクティブ・ラーニング</p> <ul style="list-style-type: none"> <li><input type="checkbox"/> PBL (課題解決型学習)</li> <li><input type="checkbox"/> 反転授業 (知識習得を教室外、知識確認等を教室で行う授業)</li> <li><input checked="" type="checkbox"/> ディスカッション、ディベート</li> <li><input type="checkbox"/> グループワーク</li> <li><input type="checkbox"/> プレゼンテーション</li> <li><input type="checkbox"/> 実習、フィールドワーク</li> <li><input type="checkbox"/> その他</li> </ul> <p>その他アクティブ・ラーニング内容</p> <p>授業でのICT活用</p> <ul style="list-style-type: none"> <li><input type="checkbox"/> 双方向型授業に活用する</li> <li><input type="checkbox"/> 自主学習支援に活用する</li> </ul> <p>オープンな教材</p> <ul style="list-style-type: none"> <li><input type="checkbox"/> 担当教員が作成したオープンな教材を、講義または自主学習で活用する</li> <li><input type="checkbox"/> 他大学等が提供するオープンな教材を講義で活用する</li> <li><input type="checkbox"/> 他大学等が提供するオープンな教材を自主学習で活用する</li> </ul> <p>担当教員の実務経験</p> <ul style="list-style-type: none"> <li><input checked="" type="checkbox"/> ある</li> </ul> <p>実務経験の内容</p>

講義科目名称： 高次脳機能・心理障害リハビリテーション学特 授業コード：  
論

英文科目名称： Advanced Rehabilitation for Higher Brain  
Dysfunction and Psychological Disorders

開講期間	配当年	単位数	科目必選区分
後期	1	2	選択
担当教員			
西川 隆 福原 啓太			
添付ファイル			

授業の目標・概要	<p>人間存在を生物・心理・社会 (Bio-psycho-sociality) 的次元の総体と捉えるモデルは、応用面の限界が指摘されているものの、医療の実践において重要な観点を提供し続けている。一方で、近年の脳科学・認知科学の進歩を背景に、器質性脳障害と心理障害の病態を統一的に捉えようとする病態理論が提起されている。一見矛盾するかに見える両者の理論は、脳機能に生物・心理・社会の各次元を表象する機構を想定する理論的枠組みによって統合的に把握することが可能であり、その枠組みに基づいてまた、治療とケアの戦略を導くことも期待できる。</p> <p>本講では、こうした多次元の脳-認知理論の観点から、高次脳機能障害と心理障害を分析し治療戦略を立てるために必要となる脳機能解剖学に関する知識を総括するとともに、今日の有力な治療技法である認知療法、行動療法、精神分析の諸理論との関連を論じて、それらの知識を統合的に関連付けて修得させる。また事例検討を通じて、それらの病態理論を臨床的に応用する能力を養う。</p>
学習の到達目標	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 生物心理社会モデルについて内容と意義を説明することができる。</li> <li>2. 脳の階層的進化・発達の過程を理解し説明することができる。</li> <li>3. 大脳の左右半球への機能分化および半球内機能分化の概要を理解し説明することができる。</li> <li>4. 行動療法の理論的枠組みを理解し説明、応用することができる。</li> <li>5. 認知療法の理論的枠組みを理解し説明、応用することができる。</li> <li>6. 人間発達理論の理論的枠組みを理解し説明、応用することができる。</li> </ol>
授業方法・形式	講義
授業計画	<p>第1回 生物心理社会モデル(Biopsychosocial model) (Engel GE)の医学思想史的背景 生物医学モデル (Biomedicine model)への批判としての生物心理社会モデル (西川)</p> <p>第2回 生物心理社会モデルの展開と実践例 生物心理社会モデルに対する今日の評価と批判 (西川)</p> <p>第3回 脳の階層進化・発達理論 脳の三位一体(MacLean PD)理論と今日の進化論的観点 辺縁系の構造と情動回路 (西川)</p> <p>第4回 陳述記憶と情動記憶の並列的階層構造と精神症状の病態基盤 妄想発症の神経心理学的病態理論、外傷後ストレス障害の神経心理学的病態理論 (西川)</p> <p>第5回 学習理論と行動療法の神経生理的基盤 レスポンデント条件付けと情動回路、オペラント強化と報酬系 (西川)</p> <p>第6回 大脳の左右半球への機能分化と半球内機能分化 分割脳研究の知見 言語的認知と非言語的認知の相補性とその破綻としての精神障害の諸相 (西川)</p> <p>第7回 多元主義的立場としての特質・行動・生活史の観点とその選択 認知療法(Beck AT)の理論的背景 「感情の病」から「認知の歪み」へのパラダイム・シフト (福原)</p> <p>第8回 認知療法の展開と実践例 認知行動療法への理論的展開と今日の評価 (福原)</p> <p>第9回 精神分析的人間発達理論 対人関係論(Sullivan HS)とライフサイクル理論(Erikson EH)を軸とする理論的枠組み (福原)</p> <p>第10回 人間発達理論の展開と実践例 ライフサイクル理論の今日的課題 (福原)</p> <p>第11回 心の理論(Theory of mind) (Premack DG &amp; Woodruff D)とその障害 自閉症スペクトラムおよび統合失調症における心の理論の障害 社会的認知機能への発展 (福原)</p> <p>第12回 事例検討 I 脳器質損傷が主な原因とみられる事例の多次元的評価と治療方法の検討 (西川・福原)</p>

	<p>第13回 事例検討Ⅱ 心理的障害が主な原因とみられる事例の多次的評価と治療方法の検討 (西川・福原)</p> <p>第14回 事例検討Ⅲ 社会的問題が主な原因とみられる事例の多次的評価と治療方法の検討 (西川・福原)</p> <p>第15回 まとめ 生物心理社会モデルの今日的意義 (西川・福原)</p>
成績評価の基準	各回の授業の理解度を確保するクイズ(40%) 期末筆記試験(60%)
課題(試験やレポート等)に対するフィードバックの方法	
準備学習・復習及び授業時間外の課題	(事前学習) 事前に配布する資料に目を通しておくこと。 (事後学習) 毎回の授業内容に関する課題を期限までに提出すること。
履修上のアドバイス及び留意点	
教材・教科書	科目担当教員が作成した資料を授業前に配布する。
参考書	<ul style="list-style-type: none"> <li>・「高次脳機能障害学 第3版」石合純夫 著、医歯薬出版(2022)</li> <li>・「精神医学マイテキスト 改訂版」武田雅俊 監修、金芳堂(2014)</li> <li>・「神経心理学入門」山鳥重 著、医学書院(1985)</li> <li>・「DSM-5 精神疾患の診断・統計マニュアル」高橋三郎、大野裕 監訳、医学書院(2014)</li> <li>・「マクヒュー／スラヴニー 現代精神医学」澤明 監訳、みすず書房(2019)</li> <li>・「現代精神医学原論【新装版】」ナシア・ガミー 著、みすず書房(2020)</li> <li>・「現代精神医学のゆくえバイオサイコソーシャル折衷主義からの脱却」ナシア・ガミー 著、みすず書房(2012)</li> </ul> <p>その他適宜授業で紹介する。</p>
授業の特徴	<p>授業で実践するアクティブ・ラーニング</p> <ul style="list-style-type: none"> <li><input type="checkbox"/> PBL(課題解決型学習)</li> <li><input type="checkbox"/> 反転授業(知識習得を教室外、知識確認等を教室で行う授業)</li> <li><input type="checkbox"/> ディスカッション、ディベート</li> <li><input type="checkbox"/> グループワーク</li> <li><input type="checkbox"/> プレゼンテーション</li> <li><input type="checkbox"/> 実習、フィールドワーク</li> <li><input type="checkbox"/> その他</li> </ul> <p>その他アクティブ・ラーニング内容</p> <p>授業でのICT活用</p> <ul style="list-style-type: none"> <li><input type="checkbox"/> 双方向型授業に活用する</li> <li><input type="checkbox"/> 自主学習支援に活用する</li> </ul> <p>オープンな教材</p> <ul style="list-style-type: none"> <li><input type="checkbox"/> 担当教員が作成したオープンな教材を、講義または自主学習で活用する</li> <li><input type="checkbox"/> 他大学等が提供するオープンな教材を講義で活用する</li> <li><input type="checkbox"/> 他大学等が提供するオープンな教材を自主学習で活用する</li> </ul> <p>担当教員の実務経験</p> <ul style="list-style-type: none"> <li><input type="checkbox"/> ある</li> </ul> <p>実務経験の内容</p>

講義科目名称： 臨床実践特別演習

授業コード：

英文科目名称： Special Seminars in Clinical Therapeutics Area

開講期間	配当年	単位数	科目必選区分
前期	2	4	選択
担当教員			
西川 隆 橋本 雅至 伊藤 健一 飯塚 照史 藤田 信子 阿波 邦彦 野中 紘士 福原 啓太			
添付ファイル			

授業の目標・概要	臨床リハビリテーションの実践過程で浮かび上がる諸問題を科学的根拠にもとづいて解決するために必要な方法論の修得を目的として、3つの専門領域の担当教員が臨床および研究に関する経験と知識を伝授するための演習を行う。具体的には、各専門領域の教員と意見交換しながら、学生自ら疑問を発掘し、学術的意義と科学的妥当性を有する研究課題へと練成していくための、文献検索、一次情報・二次情報の入手と精選、重要文献の精読とノート作成、現時点で研究の到達点の見極めと知見の総合、課題の焦点化の過程を実体験しつつ修得する。さらに抽出された課題を解決するための調査や実験の基本構想を案出し、指導教員の指導の下に研究プロトコルを試作して、その研究遂行に必要な設備・機材・人員・資金を確保するための方策、および研究協力の依頼、倫理審査の申請等の諸手続き等に関するマネジメントを考案する。
学習の到達目標	1. 臨床的疑問を解決するために関連文献を検索する手段・方法を修得する。 2. 文献の検索・解読を通じて臨床的疑問から科学的に妥当な研究課題を設定することができる。 3. 研究課題に関連した文献をレビューしてひとつの記事にまとめることができる。 4. 研究課題を解決するための模擬的な研究プロトコルを担当教員の指導を受けて案出できる。 5. 自らの検討した過程と内容を学会発表の形式を模してプレゼンテーションし、担当教員の司会のもとに大学院生相互でディスカッションすることができる。
授業方法・形式	演習
授業計画	<p>第1回から第10回 I. 運動機能障害リハビリテーション領域の実践演習 (橋本、飯塚、藤田)</p> <p>(1) 各自や教員の リハビリテーション実践の経験を振り返りつつ、担当教員および他の大学院生と意見交換をする過程で、運動機能障害に関する臨床的疑問を発掘する。 (2) 臨床的疑問に関連した国内外の文献を医学分野の文献データベースから広く検索し、科学的根拠に裏付けられた重要度の高い複数の文献を精選し入手する。 (3) 複数の重要文献を精読・理解し、検討課題に関する知識を蓄積する中で、現在の臨床研究の到達点と未解決の課題を明確化し、将来の検討課題として設定する。 (4) 担当教員の指導のもとに、検討課題の文献レビューを文章化するとともに、課題を解決するための調査や実験の基本構想を案出する。 (5) 各自の研究課題を学会発表の形式を模してプレゼンテーションし、担当教員の司会のもとに大学院生相互でディスカッションする。</p> <p>第11回から第20回 II. 内部機能障害リハビリテーション領域の実践演習 (伊藤、阿波、野中)</p> <p>(1) 各自や教員のリハビリテーション実践の経験を振り返りつつ、担当教員および他の大学院生と意見交換をする過程で、内部機能障害に関する臨床的疑問を発掘する。 (2) 臨床的疑問に関連した国内外の文献を医学分野の文献データベースから広く検索し、科学的根拠に裏付けられた重要度の高い複数の文献を精選し入手する。 (3) 複数の重要文献を精読・理解し、検討課題に関する知識を蓄積する中で、現在の臨床研究の到達点と未解決の課題を明確化し、将来の検討課題として設定する。 (4) 担当教員の指導のもとに、検討課題の文献レビューを文章化するとともに、課題を解決するための調査や実験の基本構想を案出する。 (5) 各自の研究課題を学会発表の形式を模してプレゼンテーションし、担当教員の司会のもとに大学院生相互でディスカッションする。</p> <p>第21回から第30回 II. 高次脳機能・心理障害リハビリテーション領域の実践演習 (西川、福原)</p> <p>(1) 各自や教員のリハビリテーション実践の経験を振り返りつつ、担当教員および他の大学院生と意見交換をする過程で、内部機能障害に関する臨床的疑問を発掘する。 (2) 臨床的疑問に関連した国内外の文献を医学分野の文献データベースから広く検索し、科学的根拠に裏付けられた重要度の高い複数の文献を精選し入手する。 (3) 複数の重要文献を精読・理解し、検討課題に関する知識を蓄積する中で、現在の臨床研究の到達点と未解決の課題を明確化し、将来の検討課題として設定する。 (4) 担当教員の指導のもとに、検討課題の文献レビューを文章化するとともに、課題を解決するための調査や実験の基本構想を案出する。 (5) 各自の研究課題を学会発表の形式を模してプレゼンテーションし、担当教員の司会のもとに大学院生相互でディスカッションする。</p>
成績評価の基準	演習の各段階（臨床疑問の発掘、文献検索、文献読解、研究課題の設定、文献レビューのまとめ、研究計画書試作）における主体的取り組みと達成度の評価（3つの専門領域の評価各33.3%、計100%）
課題（試験やレポート等）に対するフィードバックの方法	
準備学習・復習及び授業時間外の課題	（事前学習）授業計画に目を通し、各回の授業に関連する資料・参考書に目を通しておく。 （事後学習）復習：毎回の演習で行った内容をノートにまとめ、与えられた課題を提出する。
履修上のアドバイス及び留意点	

教材・教科書	必要に応じて資料を配布する。
参考書	<ul style="list-style-type: none"> <li>・「臨床研究の教科書 第2版: 研究デザインとデータ処理のポイント」川村孝 著、医学書院(2020)</li> <li>・「理学療法研究の進めかた: 基礎から学ぶ研究のすべて」森山英樹 著、文光堂(2014)</li> <li>・「臨床の“疑問”を“研究”に変える 臨床研究 first stage」網本和 著、医学書院(2017)</li> <li>・「PICO から始める医学文献検索のすすめ」小島原典子、河合富士美 編、南江堂(2019)</li> </ul> その他、適宜授業で紹介する。
授業の特徴	<p>授業で実践するアクティブ・ラーニング</p> <ul style="list-style-type: none"> <li><input type="checkbox"/> PBL (課題解決型学習)</li> <li><input type="checkbox"/> 反転授業 (知識習得を教室外、知識確認等を教室で行う授業)</li> <li><input type="checkbox"/> ディスカッション、ディベート</li> <li><input type="checkbox"/> グループワーク</li> <li><input type="checkbox"/> プレゼンテーション</li> <li><input type="checkbox"/> 実習、フィールドワーク</li> <li><input type="checkbox"/> その他</li> </ul> <p>その他アクティブ・ラーニング内容</p> <p>授業でのICT活用</p> <ul style="list-style-type: none"> <li><input type="checkbox"/> 双方向型授業に活用する</li> <li><input type="checkbox"/> 自主学習支援に活用する</li> </ul> <p>オープンな教材</p> <ul style="list-style-type: none"> <li><input type="checkbox"/> 担当教員が作成したオープンな教材を、講義または自主学習で活用する</li> <li><input type="checkbox"/> 他大学等が提供するオープンな教材を講義で活用する</li> <li><input type="checkbox"/> 他大学等が提供するオープンな教材を自主学習で活用する</li> </ul> <p>担当教員の実務経験</p> <ul style="list-style-type: none"> <li><input type="checkbox"/> ある</li> </ul> <p>実務経験の内容</p>

講義科目名称： 地域リハビリテーション・ケア学特論

授業コード：

英文科目名称： Advanced Community Rehabilitation and Care

開講期間	配当年	単位数	科目必選区分
後期	1	2	選択
担当教員			
池田 耕二 城野 靖朋 中島 大貴			
添付ファイル			

授業の目標・概要	地域により生活している人々のニーズは異なり、サービス提供にも工夫が求められる。リハビリテーションを必要としながら生活する人々のニーズを的確に捉え、ニーズに沿ったサービスを展開していく方法について検討する。様々なサービス提供活動の実際を知り、内容や提供方法を具体的に掘り下げ、専門職・関連機関の連携について考察することを通して、地域リハビリテーション活動の理念を理解し、包括的かつ継続的に活動を展開する力を養う。また、終末期ケアにおけるリハビリテーションのあり方についても検討する。		
学習の到達目標	1. 地域リハビリテーションの概要とその意義について説明できる。 2. 地域リハビリテーションに関わる職種とその役割について説明できる。 3. 地域リハビリテーションの今後の在り方について論じることが出来る。 4. 終末期ケアにおけるリハビリテーションについて概要とその意義を説明できる。		
授業方法・形式	講義		
授業計画	第1回	地域リハビリテーションの概要と意義	(池田)
	第2回	地域リハビリテーションにおける医療・保健・福祉の課題と研究動向	(池田)
	第3回	地域リハビリテーションにおける多職種連携	(池田)
	第4回	地域リハビリテーションの評価・実践の在り方	(池田)
	第5回	地域リハビリテーションにおける運動機能評価の課題と研究動向	(城野)
	第6回	地域リハビリテーションにおける運動機能評価の実践	(城野)
	第7回	運動機能障害に対する地域リハビリテーションの実践	(城野)
	第8回	地域リハビリテーションにおける認知機能評価の課題と研究動向	(中島)
	第9回	地域リハビリテーションにおける認知機能評価の実践	(中島)
	第10回	認知機能障害に対する地域リハビリテーションの実践	(中島)
	第11回	終末期・緩和ケア領域におけるリハビリテーションの役割	(池田)
	第12回	終末期・緩和ケア領域におけるリハビリテーションの課題と研究動向	(池田)
	第13回	終末期・緩和ケア領域におけるがん患者に対する地域リハビリテーション・ケア	(池田)
	第14回	終末期・緩和ケア領域における非がん患者に対する地域リハビリテーション・ケア	(池田)
	第15回	超高齢社会における地域リハビリテーションの在り方	(池田・城野・中島)
成績評価の基準	各回の授業の理解度を確認するクイズ形式の課題(40%) 期末レポート課題(60%)		
課題(試験やレポート等)に対するフィードバックの方法	個別に実施する。		
準備学習・復習及び授業時間外の課題	(事前学習) 関連書籍に目を通しておくこと。 (事後学習) 毎回の授業内容に関する課題をまとめておくこと。		
履修上のアドバイス及び留意点	不明な点がある場合は事前にご相談ください。		
教材・教科書	毎回の授業で資料を配布する。		

参考書	<ul style="list-style-type: none"> <li>・「在宅医療バイブル 第2版」川越正平 著、日本医事新報社（2018）</li> <li>・「終末期理学療法の実践」日高正巳・桑山浩明 編、文光堂（2015）</li> <li>・「専門家をめざす人のための緩和医療学(改訂第2版)」日本緩和医療学会 編、南江堂（2019）</li> </ul>
授業の特徴	<p>授業で実践するアクティブ・ラーニング</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>■PBL（課題解決型学習）</li> <li>■反転授業（知識習得を教室外、知識確認等を教室で行う授業）</li> <li>■ディスカッション、ディベート</li> <li>■グループワーク</li> <li>■プレゼンテーション</li> <li>□実習、フィールドワーク</li> <li>□その他</li> </ul> <p>その他アクティブ・ラーニング内容</p> <p>授業でのICT活用</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>■双方向型授業に活用する</li> <li>□自主学習支援に活用する</li> </ul> <p>オープンな教材</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>□担当教員が作成したオープンな教材を、講義または自主学習で活用する</li> <li>□他大学等が提供するオープンな教材を講義で活用する</li> <li>□他大学等が提供するオープンな教材を自主学習で活用する</li> </ul> <p>担当教員の実務経験</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>■ある</li> </ul> <p>実務経験の内容</p> <p>病院にて理学療法士、作業療法士としての臨床経験を有する。</p>

講義科目名称： 疼痛ケア・リハビリテーション学特論

授業コード：

英文科目名称： Advanced Pain Care and Rehabilitation

開講期間	配当年	単位数	科目必選区分
後期	1	2	選択
担当教員			
柴田 政彦 吉川 義之 前田 吉樹			
添付ファイル			

授業の目標・概要	<p>本科目では、「人間にとって痛みとは何か」について学ぶ。痛みのシグナルは末梢の侵害受容器から末梢神経、脊髄、脳と伝わり、脳で統合されて痛みとして感じる。痛覚伝達のしくみを学び、感覚としての痛みを理解し、さらに情動、行動といった痛みの多面性について理解を深める。痛みに関連した研究論文を抄読し理解し考察する機会を与える。これらの機会を通して、臨床現場で遭遇する様々な痛みに対し適切な判断を下し対応できる能力を養う。</p>		
学習の到達目標	<p>1. 痛覚伝達について説明できる。                  2. 急性痛と慢性痛の違いについて説明できる。                  3. 痛みのある患者に対するリハビリテーションとして認知行動療法、運動療法の実践について説明できる。                  4. 痛みに関する研究動向について理解できる。</p>		
授業方法・形式	講義		
授業計画	第1回	痛みとは何か？： 痛みの定義、痛覚伝達認知機構、修飾メカニズムについて学ぶ (柴田)	
	第2回	痛みの慢性化要因 さまざまな痛みの慢性化の要因とその評価法について知る (柴田)	
	第3回	慢性疼痛に対するコミュニケーションスキルと認知行動療法 痛みの訴えの強い患者に対するコミュニケーションの取り方と認知行動療法の適応と方法について学ぶ (柴田)	
	第4回	疼痛に対するリハビリテーション・アウトカム1 痛みの強さの計り方 痛みの主観的な強さを指標とした研究手法の実際について (吉川)	
	第5回	疼痛ケア・リハビリテーションと物理療法1 臨床における物理療法の歴史と現状 痛みの緩和を目的とした物理療法の歴史と実際について (吉川)	
	第6回	疼痛ケア・リハビリテーションと物理療法2 疼痛緩和に対する物理療法のエビデンス 痛みの緩和を目的とした物理療法の適応と限界 (吉川)	
	第7回	疼痛ケア・リハビリテーションと物理療法3 コンディショニングとしての物理療法 創傷治癒に対する物理療法等、近年の研究動向と物理療法の新たな潮流 (吉川)	
	第8回	疼痛に対するリハビリテーション：アウトカム2 痛みの情動的側面の計り方 痛みの情動的側面の計測を試みる研究手法の実際について (前田)	
	第9回	慢性痛患者に対するリハビリテーション評価と運動療法 疼痛リハビリテーション・ケアの評価と治療に必要とされる技術 (前田)	
	第10回	認知神経科学に基づく疼痛ケア・リハビリテーション 近年の神経科学の知見を踏まえた介入法の実際と研究動向について (前田)	
	第11回	恐怖回避思考と条件付け学習の関連性 古典的条件付けおよびオペラント条件付けと痛みの慢性化の関連性 (前田)	
	第12回	条件付け学習を応用した介入法と研究法の実際 条件付けの消去・般化・再固定現象とその応用 (前田)	
	第13回	論文抄読 1回目 痛みに関連した英語論文を抄読し、理解・説明する機会を与える (柴田)	
	第14回	論文抄読 2回目 痛みに関連した英語論文を抄読し、理解・説明する機会を与える (柴田)	
	第15回	まとめ 疼痛ケア・リハビリテーションの症例検討と今後の展望 (柴田・前田・吉)	

	川)
成績評価の基準	各回の授業ごとに課する筆記課題またはクイズ形式の課題(40%) 期末試験(60%)
課題(試験やレポート等)に対するフィードバックの方法	
準備学習・復習及び授業時間外の課題	(事前学習) 配布資料と関連書籍に目を通しておくこと。 (事後学習) 毎回の授業内容の要点をまとめておくこと。
履修上のアドバイス及び留意点	
教材・教科書	毎回の授業で資料を配布する。
参考書	<ul style="list-style-type: none"> <li>・「痛みの集学的診療：痛みの教育コアカリキュラム」日本疼痛学会編、真興交易医書出版(2016)</li> <li>・「慢性疼痛診療ガイドライン」慢性の痛み政策研究事業 監、真興交易医書出版(2016)</li> <li>・「痛みの教育コンテンツ提供システムのご案内」- 慢性の痛み情報センターAMED 研究班(2014)</li> </ul> <a href="https://itami-net.or.jp/itamikyouiku_form">https://itami-net.or.jp/itamikyouiku_form</a> ・その他適宜授業で紹介する。
授業の特徴	<p>授業で実践するアクティブ・ラーニング</p> <ul style="list-style-type: none"> <li><input type="checkbox"/> PBL (課題解決型学習)</li> <li><input type="checkbox"/> 反転授業 (知識習得を教室外、知識確認等を教室で行う授業)</li> <li><input type="checkbox"/> ディスカッション、ディベート</li> <li><input checked="" type="checkbox"/> グループワーク</li> <li><input checked="" type="checkbox"/> プレゼンテーション</li> <li><input type="checkbox"/> 実習、フィールドワーク</li> <li><input type="checkbox"/> その他</li> </ul> <p>その他アクティブ・ラーニング内容</p> <p>授業でのICT活用</p> <ul style="list-style-type: none"> <li><input type="checkbox"/> 双方向型授業に活用する</li> <li><input type="checkbox"/> 自主学習支援に活用する</li> </ul> <p>オープンな教材</p> <ul style="list-style-type: none"> <li><input checked="" type="checkbox"/> 担当教員が作成したオープンな教材を、講義または自主学習で活用する</li> <li><input type="checkbox"/> 他大学等が提供するオープンな教材を講義で活用する</li> <li><input type="checkbox"/> 他大学等が提供するオープンな教材を自主学習で活用する</li> </ul> <p>担当教員の実務経験</p> <ul style="list-style-type: none"> <li><input checked="" type="checkbox"/> ある</li> </ul> <p>実務経験の内容</p>

講義科目名称： 高齢者リハビリテーション学特論

授業コード：

英文科目名称： Advanced Rehabilitation for the Elderly

開講期間	配当年	単位数	科目必選区分
後期	1	2	選択
担当教員			
辻下 守弘 山形 力生 大浦 智子 滝本 幸治			
添付ファイル			

授業の目標・概要	高齢者に対するリハビリテーションは、単に高齢者の特異的疾患とそれによる障害に対応するだけでなく、高齢者特有の身体的、心理・社会的な特性を理解して、リハビリテーションを行う必要がある。本講義では、高齢者それぞれの特性に応じて、日常生活の活動を高め、積極的に社会への参加を促し、それによって一人ひとりの生きがいやQOLの向上を目指すことが可能となるリハビリテーションに必要な専門的知識と技術を教授し、今後、医療・介護・予防・住まい・生活支援が一体的に提供される「地域包括ケアシステム」における高齢者リハビリテーションの専門性を高め、リーダーシップを発揮することができる専門職を育成する。		
学習の到達目標	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 高齢者リハビリテーションの現状と課題を把握する。</li> <li>2. 高齢者の身体的、心理・社会的特徴について理解し、リハビリテーションへの応用力を養う。</li> <li>3. 高齢者の運動器障害（ロコモティブシンドローム）に関する理解と健康支援について習得する。</li> <li>4. 高齢者リハビリテーションの課題と将来展望について議論できる。</li> </ol>		
授業方法・形式	講義		
授業計画	第1回	授業ガイダンス・高齢者社会の実態と高齢者リハビリテーションの現状について (辻下)	
	第2回	高齢者リハビリテーションの問題点と今後の課題について (辻下)	
	第3回	高齢者の身体的特徴とリハビリテーションにおける配慮 (辻下)	
	第4回	高齢者の心理的特徴とリハビリテーションにおける配慮 (辻下)	
	第5回	高齢者の社会的特徴とリハビリテーションにおける配慮 (辻下)	
	第6回	高齢者における運動器障害（ロコモティブシンドローム）の概要 (辻下)	
	第7回	高齢者の運動器障害と日常生活動作障害の実態 (山形)	
	第8回	高齢者の上肢機能障害と日常生活動作障害の実態 (山形)	
	第9回	高齢者に対する作業療法的な日常生活向上アプローチ (大浦)	
	第10回	高齢者に対する作業療法的なQOL（生活の質）向上アプローチ (大浦)	
	第11回	高齢者に対する訪問リハビリテーションのアセスメント (大浦)	
	第12回	高齢者に対する訪問リハビリテーションのアプローチ	(大浦)
	第13回	高齢者の運動機能向上を目的とした運動療法アプローチ (滝本)	
	第14回	高齢者の転倒予防に対する体操の実施方法 (滝本)	
	第15回	高齢者の健康増進に対する具体的アプローチの課題 (滝本)	

成績評価の基準	毎回の授業の理解度を確保するための筆記課題(40%)期末筆記試験(60%)
課題(試験やレポート等)に対するフィードバックの方法	
準備学習・復習及び授業時間外の課題	
履修上のアドバイス及び留意点	
教材・教科書	テキストはないが、科目担当教員が作成した資料を授業前に配布する。
参考書	池添 冬芽(編集)「高齢者理学療法学(Crosslink 理学療法学テキスト)」メジカルビュー社(2020/2/3) 日本リハビリテーション医学教育推進機構(一般社団法人)(著)「生活期のリハビリテーション医学・医療テキスト」医学書院(2020/2/17) テキストはないが、科目担当教員が作成した資料を授業前に配布する。参考書： ・「高齢者理学療法学(Crosslink 理学療法学テキスト)」池添冬芽 編、メジカルビュー社(2020) ・「生活期のリハビリテーション医学・医療テキスト」日本リハビリテーション医学教育推進機構 著、医学書院(2020) ・「Treatment Planning for Person-Centered Care: Shared Decision Making for Whole Health (Practical Resources for the Mental Health Professional) second edition」Neal Adams, Diane M. Grieder 著、Academic Press(2013) ・「生活環境学テキスト」細田多穂 監、南江堂(2022) ・「ケアマネジメントのための福祉用具アセスメント・マニュアル」市川洸 監、中央法規出版(2021)
授業の特徴	<p>授業で実践するアクティブ・ラーニング</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>■PBL(課題解決型学習)</li> <li>■反転授業(知識習得を教室外、知識確認等を教室で行う授業)</li> <li>■ディスカッション、ディベート</li> <li>■グループワーク</li> <li>■プレゼンテーション</li> <li>□実習、フィールドワーク</li> <li>□その他</li> </ul> <p>その他アクティブ・ラーニング内容</p> <p>授業でのICT活用</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>■双方向型授業に活用する</li> <li>□自主学习支援に活用する</li> </ul> <p>オープンな教材</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>□担当教員が作成したオープンな教材を、講義または自主学习で活用する</li> <li>□他大学等が提供するオープンな教材を講義で活用する</li> <li>□他大学等が提供するオープンな教材を自主学习で活用する</li> </ul> <p>担当教員の実務経験</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>□ある</li> </ul> <p>実務経験の内容</p> <p>病院にて理学療法士、作業療法士としての臨床経験を有する。</p>

講義科目名称： 生活支援特別演習

授業コード：

英文科目名称： Special Seminars in Livelihood Support Area

開講期間	配当年	単位数	科目必選区分
前期	2	4	選択
担当教員			
辻下 守弘 山形 力生 柴田 政彦 池田 耕二 大浦 智子 吉川 義之 城野 靖朋 滝本 幸治 前田 吉樹 中島 大貴			
添付ファイル			

授業の目標・概要	臨床リハビリテーションの実践過程で浮かび上がる諸問題を科学的根拠にもとづいて解決するために必要な方法論の修得を目的として、3つの専門領域の担当教員が臨床および研究に関する経験と知識を伝授するための演習を行う。具体的には、各専門領域の教員と意見交換しながら、学生自ら 疑問を発掘し、学術的意義と科学的妥当性を有する研究課題へと錬成していくための、文献検索、一次情報・二次情報の入手と精選、重要文献の精読とノート作成、現時点で研究の到達点の見極めと知見の総合、課題の焦点化の過程を実体験しつつ修得する。さらに抽出された課題を解決するための調査や実験の基本構想を案出し、指導教員の指導の下に研究プロトコルを試作して、その研究遂行に必要な設備・機材・人員・資金を確保するための方策、および研究協力の依頼、倫理審査の申請等の諸手続き等に関するマネジメントを考案する。
学習の到達目標	1. 臨床的疑問を解決するために関連文献を検索する手段・方法を修得する。 2. 文献の検索・解読を通じて臨床的疑問から科学的に妥当な研究課題を設定することができる。 3. 研究課題に関連した文献をレビューしてひとつの記事にまとめることができる。 4. 研究課題を解決するための模擬的な研究プロトコルを担当教員の指導を受けて案出できる。 5. 自らの検討した過程と内容を学会発表の形式を模してプレゼンテーションし、担当教員の司会のもとに大学院生相互でディスカッションすることができる。
授業方法・形式	演習
授業計画	<p>第1回から第10回 I. 地域リハビリテーション・ケア領域の実践演習 (池田、城野、中島)</p> <p>(1) 学生各自のリハビリテーション実践や臨床実習の経験を振り返りつつ、担当教員および他の大学院生と意見交換をする過程で、運動機能障害に関する臨床的疑問を発掘する。 (2) 臨床的疑問に関連した国内外の文献を医学分野の文献データベースから広く検索し、科学的根拠に裏付けられた重要度の高い複数の文献を精選し入手する。 (3) 複数の重要文献を精読・理解し、検討課題に関する知識を蓄積する中で、現在の臨床研究の到達点と未解決の課題を明確化し、将来の検討課題として設定する。 (4) 担当教員の指導のもとに、検討課題の文献レビューを文章化するとともに、課題を解決するための調査や実験の基本構想を案出する。 (5) 各自の研究課題を学会発表の形式を模してプレゼンテーションし、担当教員の司会のもとに大学院生相互でディスカッションする。</p> <p>第11回から第20回 II. 疼痛ケア・リハビリテーション領域の実践演習 (柴田、前田、吉川)</p> <p>(1) 学生各自のリハビリテーション実践や臨床実習の経験を振り返りつつ、担当教員および他の大学院生と意見交換をする過程で、内部機能障害に関する臨床的疑問を発掘する。 (2) 臨床的疑問に関連した国内外の文献を医学分野の文献データベースから広く検索し、科学的根拠に裏付けられた重要度の高い複数の文献を精選し入手する。 (3) 複数の重要文献を精読・理解し、検討課題に関する知識を蓄積する中で、現在の臨床研究の到達点と未解決の課題を明確化し、将来の検討課題として設定する。 (4) 担当教員の指導のもとに、検討課題の文献レビューを文章化するとともに、課題を解決するための調査や実験の基本構想を案出する。 (5) 各自の研究課題を学会発表の形式を模してプレゼンテーションし、担当教員の司会のもとに大学院生相互でディスカッションする。</p> <p>第21回から第30回 III. 高齢者リハビリテーション領域の実践演習 (辻下、山形、大浦、滝本)</p> <p>(1) 学生各自のリハビリテーション実践や臨床実習の経験を振り返りつつ、担当教員および他の大学院生と意見交換をする過程で、内部機能障害に関する臨床的疑問を発掘する。 (2) 臨床的疑問に関連した国内外の文献を医学分野の文献データベースから広く検索し、科学的根拠に裏付けられた重要度の高い複数の文献を精選し入手する。 (3) 複数の重要文献を精読・理解し、検討課題に関する知識を蓄積する中で、現在の臨床研究の到達点と未解決の課題を明確化し、将来の検討課題として設定する。 (4) 担当教員の指導のもとに、検討課題の文献レビューを文章化するとともに、課題を解決するための調査や実験の基本構想を案出する。 (5) 各自の研究課題を学会発表の形式を模してプレゼンテーションし、担当教員の司会のもとに大学院生相互でディスカッションする。</p>
成績評価の基準	各回の理解度を確認するレポート課題 (60%) 期末レポート課題 (40%)
課題 (試験やレポート等) に対するフィードバックの方法	
準備学習・復習及び授業時間外の課題	(事前学習) 関連書籍に目を通しておくこと。 (事後学習) 毎回の授業内容に関する課題をまとめておくこと。
履修上のアドバイ	

ス及び留意点	
教材・教科書	適宜資料を配布する。
参考書	<ul style="list-style-type: none"> <li>・「Essentials of Community-Based Rehabilitation」 Satya Bhushan Nagar 著、Jaypee Brothers Medical Publishers (2016)</li> <li>・「生活期のリハビリテーション医学・医療テキスト」日本リハビリテーション医学教育推進機構、医学書院(2020)</li> <li>・「がんのリハビリテーションマニュアル 周術期から緩和ケアまで 第2版」辻哲也 編、医学書院(2021)</li> <li>・「高齢者リハビリテーション実践マニュアル-改訂第2版」宮越浩一 編、メジカルビュー社(2022)</li> </ul> その他適宜授業で紹介する。
授業の特徴	<p>授業で実践するアクティブ・ラーニング</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>■PBL (課題解決型学習)</li> <li>■反転授業 (知識習得を教室外、知識確認等を教室で行う授業)</li> <li>■ディスカッション、ディベート</li> <li>■グループワーク</li> <li>■プレゼンテーション</li> <li>□実習、フィールドワーク</li> <li>□その他</li> </ul> <p>その他アクティブ・ラーニング内容</p> <p>授業でのICT活用</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>■双方向型授業に活用する</li> <li>□自主学習支援に活用する</li> </ul> <p>オープンな教材</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>□担当教員が作成したオープンな教材を、講義または自主学習で活用する</li> <li>□他大学等が提供するオープンな教材を講義で活用する</li> <li>□他大学等が提供するオープンな教材を自主学習で活用する</li> </ul> <p>担当教員の実務経験</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>■ある</li> </ul> <p>実務経験の内容</p> <p>病院にて医師、理学療法士、作業療法士としての臨床経験を有する。</p>

講義科目名称： リハビリテーション学特別研究

授業コード：

英文科目名称： Special Research in Rehabilitation Science

開講期間	配当年	単位数	科目必選区分
通年	1・2	8	必修
担当教員			
西川 隆 辻下 守弘 山形 力生 橋本 雅至 柴田 政彦 伊藤 健一 池田 耕二 飯塚 照史 大浦 智子 藤田 信子 阿波 邦彦 野中 紘土 福原 啓太 吉川 義之 城野 靖朋 滝本 幸治			
添付ファイル			

授業の目標・概要	リハビリテーション学分野における幅広い理解を深めるとともに、臨床実践リハビリテーション学分野及び生活支援リハビリテーション学分野に関する一つの研究課題に対して、関連文献の検索と整理、研究デザインの設定からデータ収集および解析、研究結果の考察、そして論文完成に至る過程について指導する。
学習の到達目標	1. 研究計画書の作成に関する基本的な知識を説明できる。 2. リハビリテーション領域の発展や専門知識・技術の向上をはかるために、科学的思考や論理的思考に基づいた研究活動を行える。 3. 研究を推進するにあたり確かな倫理観に裏付けられた研究的態度が身に付いている。 4. 学術論文を作成するための基礎的なスキルを修得している。
授業方法・形式	演習
授業計画	<p>第1回から 30回</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 臨床実践リハビリテーション学分野、生活支援リハビリテーション学分野を取り巻く状況について関連文献をまとめプレゼンテーションを行い、研究的に取り組むべき課題を抽出する。</li> <li>2. 課題に関連した国内外の研究論文を収集し、批判的に吟味した上でレビューする。</li> <li>3. 課題に関する研究状況を明らかにし、研究的に取り組むべき課題を精選する。</li> </ol> <p>第31回から 60回</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 課題に関する研究計画書の作成</li> <li>2. 研究倫理委員会の審査申請書の作成</li> </ol> <p>第61回から 90回</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 研究対象者、施設などとの調整</li> <li>2. データ収集・整理、分析</li> </ol> <p>第91回から 120回</p> <p>論文作成</p>
成績評価の基準	文献レビュー（20%）研究方法の妥当性（20%）学位論文の完成度（60%）など、個別に評価する。
課題（試験やレポート等）に対するフィードバックの方法	
準備学習・復習及び授業時間外の課題	（事前学習）与えられた課題を実施しておくこと。 （事後学習）毎回実施した授業について整理しておくこと。
履修上のアドバイス及び留意点	
教材・教科書	必要に応じて配布する。
参考書	

授業の特徴	<p>授業で実践するアクティブ・ラーニング</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>■ PBL（課題解決型学習）</li> <li>■ 反転授業（知識習得を教室外、知識確認等を教室で行う授業）</li> <li>■ ディスカッション、ディベート</li> <li>■ グループワーク</li> <li>■ プレゼンテーション</li> <li>□ 実習、フィールドワーク</li> <li>□ その他</li> </ul> <p>その他アクティブ・ラーニング内容</p> <p>授業でのICT活用</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>■ 双方向型授業に活用する</li> <li>□ 自主学習支援に活用する</li> </ul> <p>オープンな教材</p>
-------	---

- 担当教員が作成したオープンな教材を、講義または自主学習で活用する
- 他大学等が提供するオープンな教材を講義で活用する
- 他大学等が提供するオープンな教材を自主学習で活用する

担当教員の実務経験

■ある

実務経験の内容

病院にて医師、理学療法士、作業療法士としての臨床経験を有する。